

和田遥陽：是枝裕和監督作品における現代の「家族」のかたち

要旨

食事シーンによって血縁関係のない家族でも家族になれるのか。本研究は過去の家族像とは異なる家族を映画で映し出すことが多い是枝裕和作品の中で、特定のシーンに着目することで、そのシーンから受け取れる感情や効果を検討した。家族の団らんが減り、孤食化・個食化が進んでいるからこそ、血縁関係になくとも衣食住を共にする家族像を描くことで、新しい家族のかたちを表わしているとの仮説を立て、立証を試みた。

『そして父になる』『海街 diary』『万引き家族』の3作品を対象に食事シーンや日常を切り取った場面で映し出される家族間の関係性、心理的距離の変化から、新しい家族形態や現代の家族像について考察した。

検討の結果、是枝作品は、食事シーンを使って家族的なるものを形成し、家族になっていく過程ある人々の親密さを表現する重要な役割を果たしていると結論づけた。2人の親と子のような従来の家族の姿やシェアハウスやルームシェアなどの様々な暮らし方への視点が不足していた部分が課題であり、今後も家族の多様なかたちに目を向けていきたい。